

南橘東原遺跡 No. 2

前橋市南橘公民館本館改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019. 3

前橋市教育委員会

南橘東原遺跡 No. 2

前橋市南橘公民館本館改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019. 3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元総社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野國の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する南橋東原遺跡 No.2 は、古墳時代から平安時代に至る多くの住居跡が確認された南橋東原遺跡の東側に近接し、前橋市南橋公民館本館改築工事に伴い発掘調査を行いました。今回の調査では、古墳時代の住居跡や畠等が検出され、古くから人々が生活した状況をうかがうことができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、極暑の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成31年3月

前橋市教育委員会
教育長 塩崎政江

例　　言

- 1 本報告書は前橋市南橋公民館本館改築工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	南橋東原遺跡 No. 2
調査場所	群馬県前橋市日輪寺町 160-8, 160-9, 160-10
遺跡コード	30B20
監理指導	並木史一（前橋市教育委員会）
発掘・整理担当	佐野良平（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 30 年 8 月 1 日～平成 30 年 8 月 28 日
整理作業期間	平成 30 年 9 月 1 日～平成 31 年 3 月 20 日
3 本書の原稿執筆は I を並木、他を佐野が担当した。	
4 発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。	
	桝原義久 遠藤好則 岡田 茂 加藤知恵子 鶴田栄作 河本ちさと 北爪二郎 桑原 裕 今野妙子 設樂和男 杉田友香 田部井美砂子 星野 博 細野竹美 丸山文江 水落建哉
5 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管している。	
6 下記の諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。	
	山下工業株式会社

凡　　例

- 1 本書で使用した座標は世界測地系である。挿図中に使用した北は座標北である。
- 2 挿図に国土地理院発行 1/25,000『渋川』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、住居跡：H、土坑：D、ピット：P である。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。
遺構 住居跡・土坑・ピット・・・1/30, 1/60 全体図・・・1/200 遺物 土器・・・1/3, 1/4
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

目　　次

はじめに 例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	1
	地理的環境	
	歴史的環境	
III	調査方針と経過	3
	調査箇所と基本方針	
	調査経過	
IV	基本層序	3
V	遺構と遺物	4
VI	発掘調査の成果と課題	10

I 調査に至る経緯

前橋市南橋公民館本館改築工事にあたり、平成 29 年 10 月 25 日付で前橋市長 山本 龍（生涯学習課）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年 10 月 30 日に試掘確認調査を実施した結果、竪穴住居跡などが検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

平成 30 年 5 月 29 日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 7 月 18 日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「南橋東原遺跡 No. 2」（遺跡コード：30B20）の「南橋」は地区名、「東原」は旧小字名を採用した。「No. 2」は、過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

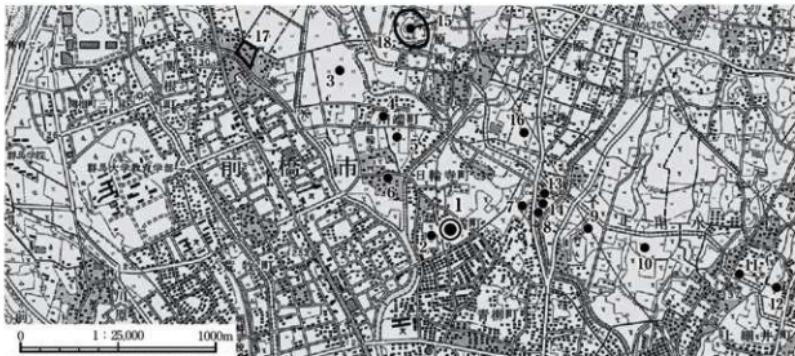
II 遺跡の位置と環境

地理的環境

遺跡は利根川の氾濫原である広瀬川低地帯に張り出した旧富士見村大河原付近を扇頂とする白川扇状地末端部付近に立地する。西方約 200 m の所には旧利根川の河道である桃ノ木川が北西方向から南流する。東へ約 400 m の所には県道津久田停留場・前橋線（石井県道）が南北に走向している。北へ約 300 m の所には国道 17 号線（上武道路）が東西方向に走向しており、それより北西約 2 km の場所で高崎・前橋市街地から延びる国道 17 号線と合流する。北西には「日輪寺町」の由来でもある十一面觀世音像（県重要文化財）を安置する名刹日輪寺が鎮座する。遺跡南側には南橋公民館が隣接し、さらに南には南橋団地や住宅地が広がっている。西側も桃ノ木川を挟んで国道 17 号線に至るまで住宅地や商業施設が立ち並んでいる。



Fig. 1 遺跡位置図



1. 本遺跡 2. 南橋東原遺跡 3. 関根細ヶ沢遺跡 4. 川端山下遺跡 5. 川端根岸遺跡 6. 日輪寺觀音前（前橋市 0903）遺跡
7. 青柳宿上遺跡 8. 引切塚遺跡（2012）9. 山王・柴遺跡 10. 上細井鰐山遺跡 11. 上細井中島遺跡 12. 新田上遺跡
13. 引切塚遺跡（1985）14. 引切塚Ⅱ遺跡 15. 九十九山古墳 16. 旭久保遺跡 17. 関根の寄居 18. 九十九山の砦

Fig. 2 周辺遺跡図

歴史的環境 (Fig. 2)

旧石器時代の遺跡は本地域では希薄ではあるが、近年の上武道路建設に伴う調査においてわずかに確認されており、青柳宿上遺跡（7）、上細井鰐山遺跡（10）、新田上遺跡（12）で石器が出土している。

縄文時代になると本遺跡周辺の遺跡数が増加する。早期では青柳宿上遺跡で堅穴住居と集石、引切塚遺跡（8）、上細井中島遺跡（11）では遺物包含層が確認されている。前期では上細井鰐山遺跡で堅穴住居が確認されている。南橋東原遺跡（2）では諸磧b式期の土器片が出土している。中期では上細井中島遺跡、新田上遺跡で加曾利E式期の集落が確認されている。青柳宿上遺跡と引切塚遺跡では後晩期の土器が数多く出土している。

本地域での弥生時代の遺跡は少ない。新田上遺跡で中期中葉～後葉にかけての堅穴住居、青柳宿上遺跡で再送墓の可能性がある土器群、中期の土器が出土した川端根岸遺跡（5）が挙げられる。

古墳時代になると赤城山南麓に広がる火山斜面上に遺跡が多く分布する。前期では山王・柴遺跡（9）で畠や堅穴住居が確認されている。中期では山王・柴遺跡で一辺9mの方墳1基と小石槨4基が確認されている。方墳の主体部は削平により消失しているが、周濠のHr-FAの堆積状況から5世紀後半～6世紀初頭のものと考えられる。新田上遺跡では当該期の堅穴住居が確認されている。後期では南橋東原遺跡、青柳宿上遺跡、山王・柴遺跡、新田上遺跡、引切塚遺跡（1985）（13）、引切塚Ⅱ遺跡（14）で集落が確認されている。関根細ヶ沢遺跡、川端根岸遺跡では古墳時代の水田跡が検出されている。山王・柴遺跡では横穴式石室の一部が調査されており、石室の構造から6世紀後半～7世紀にかけての円墳であると考えられている。引切塚Ⅱ遺跡では7世紀中頃の径10mの円墳（引間1号墳）が確認されている。九十九山の丘陵に築造された九十九山古墳（15）は自然石を用いた袖無型横穴式石室を持つ前方後円墳である。

古代になると赤城山南麓を中心に広がっていた集落域は、広瀬川低地帯にまで広がり遺跡が広範囲に確認されるようになる。南橋東原遺跡では6世紀後半～9世紀にかけての堅穴住居が確認されている。関根細ヶ沢遺跡では平安時代の集落、製鉄炉が2基確認されている。新田上遺跡では8世紀後半から10世紀中頃までの集落が展開している。旭久保遺跡（16）では古墳～平安時代にかけての堅穴住居約100軒、掘立柱建物跡約50棟が確認されている。日輪寺觀音前（前橋市 0903）遺跡では9世紀前～中葉の方形区画溝が検出された。山王・柴遺跡ではAs-B下から水田跡が確認されている。

遺跡周辺での中世城館関連の遺跡として、僅かに堀と土塁が残る関根の寄居（17）や、のろし台と考えられている九十九山の砦（18）が挙げられる。

III 調査方針と経過

調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、南橋公民館改築予定地であり、調査面積は 350 m²である。グリッド座標は世界測地系 X = + 47855.000 m · Y = - 69060.000 を X 0 · Y 0 の基点とした 4 m ピッチのものを使用し、経線を X、緯線を Y として番付して呼称とした。公共座標 X 5 · Y 5 は X = + 47835.000 m · Y = - 69040.000 である。

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 パックホー）で表土掘削を行った。遺構の確認・掘削は発掘作業員により移植コテ・鉤巻等で慎重に行われた。遺構調査に関しては土層の堆積状況を確認するために土層ベルトを設定し必要に応じて遺構断面図を作成した。出土遺物に関しては遺構面直上のものは No 遺物として平面図へ位置を記録、覆土中の遺物は一括遺物として取り上げた。

遺構図化については電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行った。断面図の一部についてはオルソフォトに変換して編集を行った。遺構の記録写真については 35 mm カラーフィルム・リバーサルフィルム、デジタルカメラの 3 種類を用いて撮影を行った。

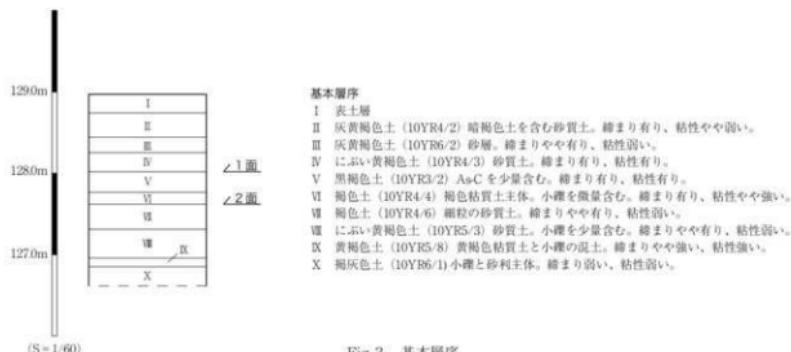
調査経過

8 月 1 日より重機による表土掘削を開始し、2 日より遺構確認作業を実施した。同日、直跡を確認後、遺構調査も開始している。9 日、住居跡を確認。11 日から 19 日までは現場作業を中断。20 日より作業再開。21 日調査区全景撮影。27・28 日は埋め戻し作業を行い、28 日に現地での作業を終えた。9 月 1 日より出土遺物・図面・写真等の整理作業および報告書作成を実施した。

IV 基本層序

調査区は北から南へと緩やかに傾斜する地形となっている。調査区西壁の中央部 (Fig. 4) を基本層序とし土層観察を行った。II・III 層土は昭和 22 年に発生したカスリーン台風による洪水堆積層と考えられる。V 層土は As-C (浅間 C 軽石 : 3 世紀後葉～4 世紀初頭) 混入黑色土であり、部分的に As-C が厚く堆積している場所も見られる。VI 層土以下は砂質土を中心とした厚い砂層の堆積が確認できる。白川扇状地を形成する堆積層の可能性が考えられる。

遺構確認面は 2 面とし、1 面目は As-C 混入黑色土の V 層土上面、2 面目は細粒の砂質土主体の VI 層土上面を確認面とした。



V 遺構と遺物

(1) 住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 5、PL. 2)

位置 X 3・4、Y 5・6 主軸方向 N - 238° - W 規模 南北軸 3.34 m、東西軸 (3.31) m。全体の 2/3 が調査区外であるため推定域を出ないが、東西軸に長い長方形と考えられる。壁高 0.48 m。床面 平坦。カマド焚口周囲は締まった印象を受けるが、明確な硬化面は確認できず。カマド 南壁に構築。全長 1.06 m、燃焼室幅 0.29 m、壁面から出る煙道部の長さ 0.32 m。右袖のみ確認、左袖は調査区外。右袖の心材に 20cm 大の川原石（旧流路の礫か）が使用されている。燃焼室は平坦。燃焼室から煙道にかけての壁面が被熱して若干焼土化している。燃焼室内には支脚石が置かれており、出土状況から判断して使用当時の位置を保持していると考えられる。住居内施設 穴柱・貯蔵穴等は検出されなかった。掘り方 As-C を微量含む砂質土で構築されている。基本土層・覆層まで掘り込まれる。出土遺物 土器器坏（1～3）、甕（4）を図示。1 はカマド内の支脚石脇から出土。2 はカマド袖脇と住居内床面出土の接合資料。3 と 4 は覆土中から出土している。覆土中からは須恵器甕の小片が 2 点出土しているが図示し得なかった。時期 出土遺物から 6 世後半～7 世紀前半と考えられる。

(2) 崩跡 (Fig. 6、PL. 2)

位置 X 2～4、Y 1・2 主軸方向 N - 68° - E 規模 故間溝の長さ 0.53～5.10 m、幅 0.21～0.40 m、深さ 0.04～0.10 m。故間溝の間隔 0.13～0.74 m。間に不規則性が認められるため、複数回の故替えが行われていたと考えられる。重複 D-1・P-2 と重複。新旧関係は本遺構→D-1・P-1 である。出土遺物無し。時期 As-C 混入黒色土（基本層序 V 層、1 面目）上面で確認されているため古墳時代に帰属すると考えられる。

(3) 土坑、ピット (Fig. 6、PL. 1)

土坑 4 基、ピット 2 基を検出した。各計測値については「Tab. 1 土坑・ピット計測表」を参照のこと。As-C 混入黒色土（基本層序 V 層）を掘り込んでいるため古墳時代以降に帰属する遺構であると考えられる。

(4) 旧流路 (Fig. 6、PL. 2・3)

2 面目で東西方向に走向すると考えられる旧河川の流路跡を確認。位置 X 2～5、Y 0～3 流路方向 N - 64° - W 規模 確認長 11.48 m、確認幅 9.25 m、確認深度 0.77 m。底面までの調査に至っていない為、全体の規模は不明。堆積層 種層上位は砂質土主体。種層厚 0.22～0.31 m。調査区壁面の崩落の恐れがあるため種層上面までの確認調査とした。部分的に種層下の掘り下げを行った結果、小礫を含んだ砂利の堆積層（層厚 50cm 以上）を確認した。形状等 今回確認された箇所は土層の堆積状態から流路の南側立ち上がり部分に当たると考えられる。そのため流路中心部は調査区外の北側に位置し、流路本体は本遺跡北側を東西方向に走向していたと推測される。種層の石材 安山岩がほとんどで、僅かに花崗岩を含んでいる。出土遺物 無し。時期 V 層土（As-C 混入黒色土）より下層での確認であるため、少なくとも As-C 降下の 3 世紀後葉以前の年代と推定される。また白川扇状地の堆積層と推定されるⅣ 層土を掘り込んでいるため、扇状地形成後の流路と考えられる。

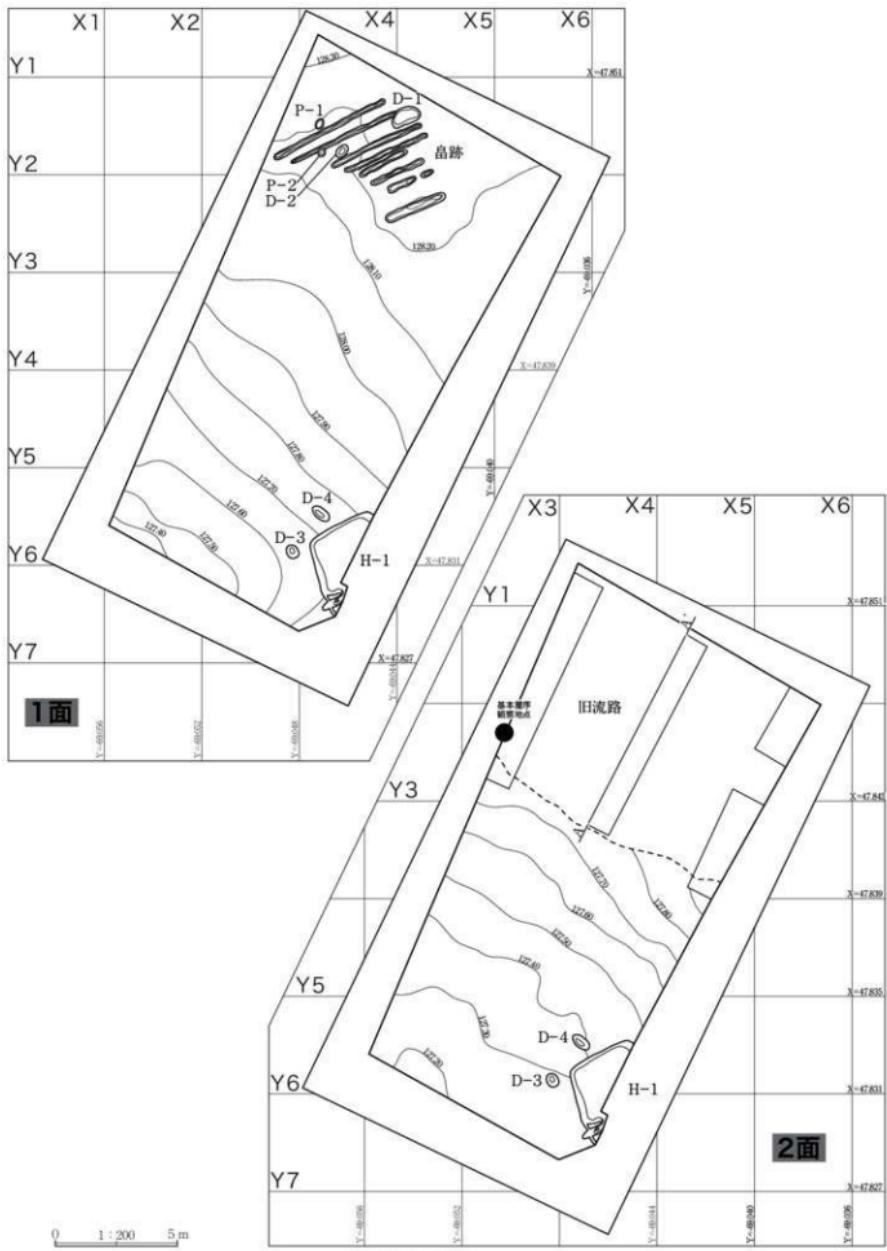


Fig. 4 全体図

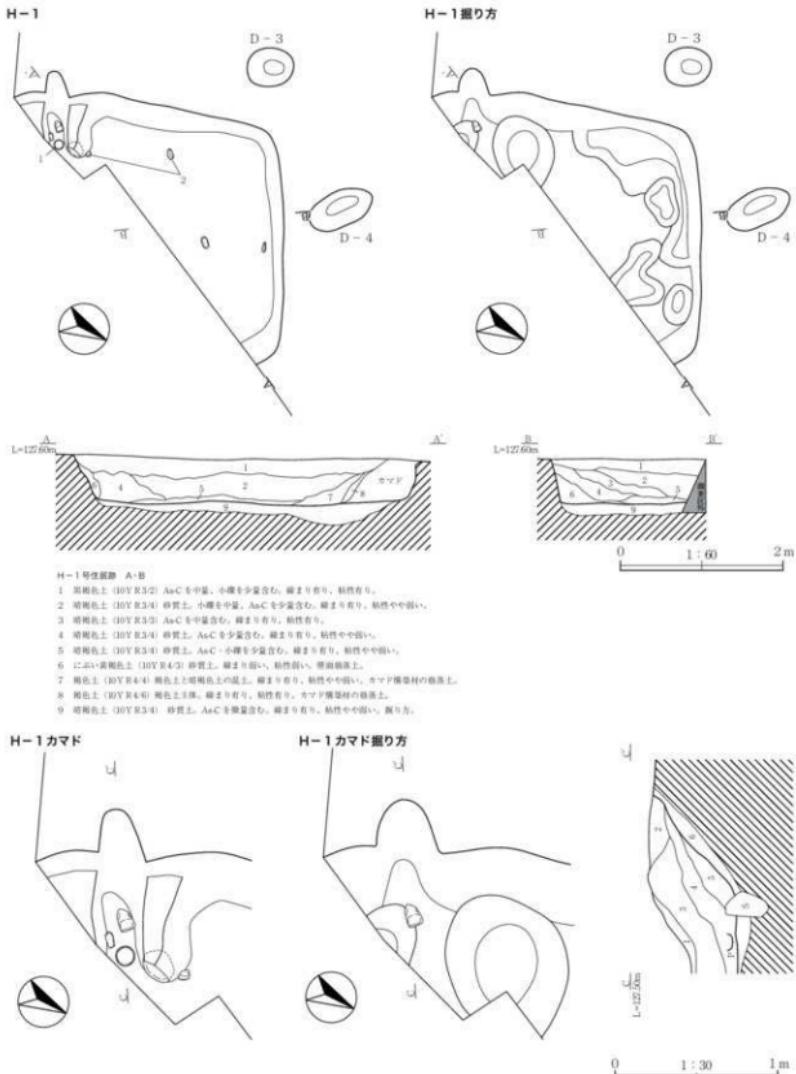
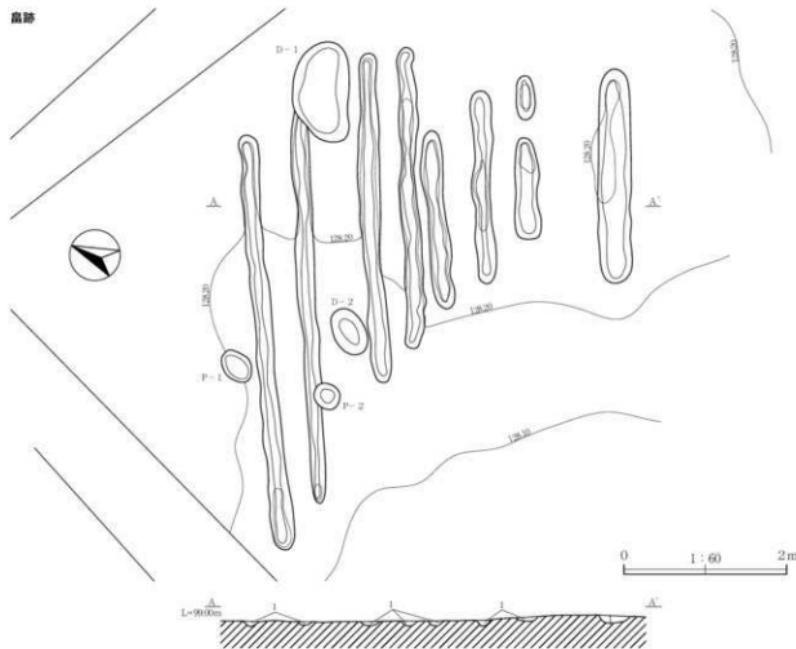
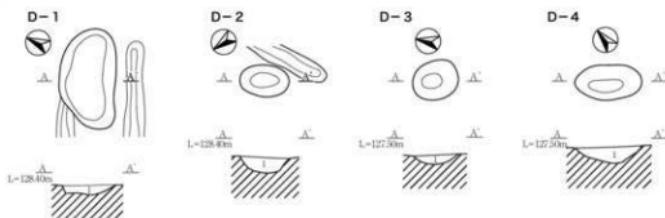


Fig. 5 H-1号佳居路



図解 A
1. 明褐色土 (10YR3/3) 砂質土。As-C を少量含む。縫まり有り。粘性やや弱い。

D-1~4、P-1・2



D-1~4号土坑、P-1・2号ピット A
1. 明褐色土 (10YR3/3) 砂質土。As-C を少量含む。縫まり有り。粘性やや弱い。

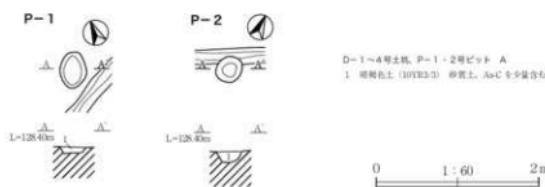


Fig. 6 岩跡、D-1~4号土坑、P-1・2号ピット

旧流路

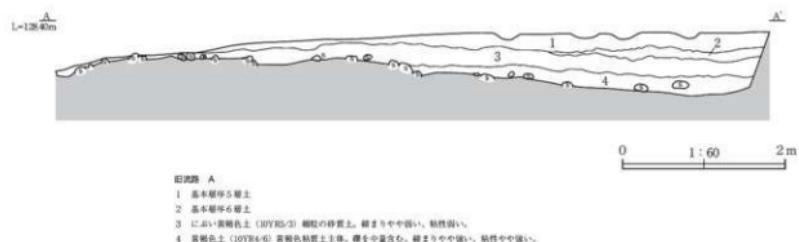
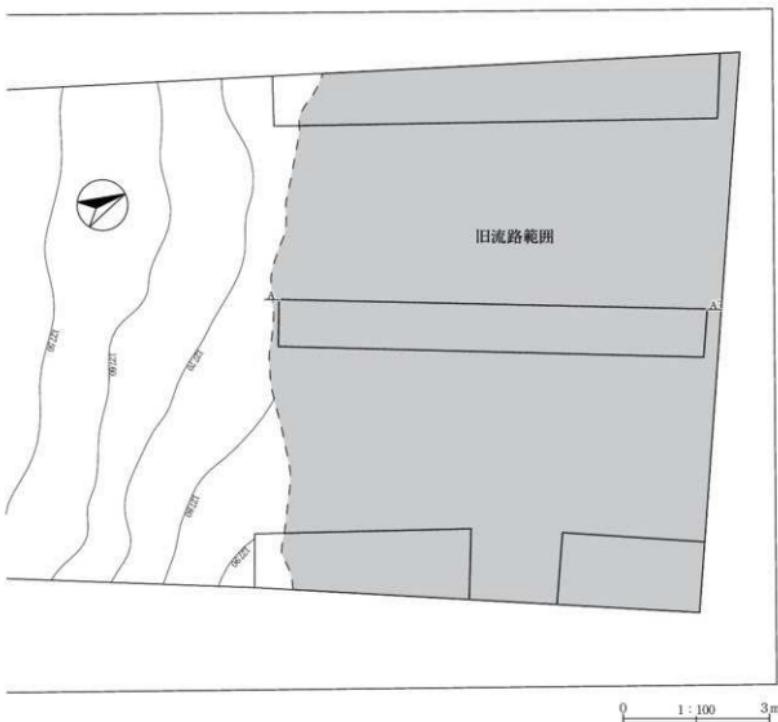


Fig. 7 旧流路

H-1

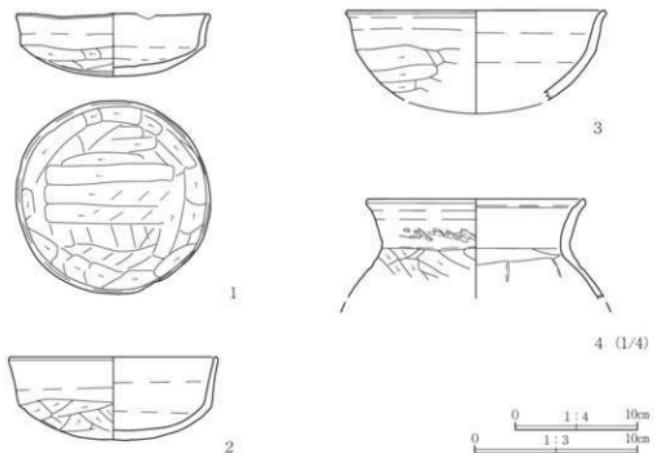


Fig. 8 H-1号住居跡出土遺物

Tab. 1 出土遺物観察表

H-1

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	施土	色調	縁形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	カマド内	土器器 环	11.8	-	3.8	白・黒色粒	橙色	外縁：口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、以下ナデ	完存
2	床面上直上	土器器 环	12.9	-	5.1	白・黒色粒	橙色	外縁：口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、以下ナデ	3/4 残存
3	覆土	土器器 环	(16.0)	-	(6.4)	黒色粒	にぶい黄橙色 ～ にぶい橙色	外縁：口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、以下ナデ	1/6 残存
4	覆土	土器器 変	(18.0)	-	(8.2)	白・黒色粒	にぶい橙色	外縁：口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ。 口縁部にヘラケズリ時の痕跡あり 内面：口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ	口縁部～胴上部破片

Tab. 2 土坑・ピット計測表

遺構名	場所	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形状
D-1	X 3・4、Y 1	1.23	0.71	0.11	長椭円形
D-2	X 3、Y 1	0.61	0.39	0.19	長椭円形
D-3	X 2、Y 5	0.56	0.50	0.13	椭円形
D-4	X 3、Y 1	0.84	0.84	0.19	長椭円形
P-1	X 3、Y 1	0.44	0.44	0.08	長椭円形
P-2	X 3、Y 1	0.34	0.34	0.14	円形

VI 発掘調査の成果と課題

本調査成果を基に、隣接する南橋東原遺跡との関連性、確認された旧流路と周辺域の地形について若干の考察を行いまとめとしたい。

住居跡

今回確認された住居跡は半分以上が調査区外ではあるものの、袖石を備えるカマドや床面直上から出土した土器等、住居跡の性格を知るまでの情報を得ることができた。特にカマドについては隣接する南橋東原遺跡で確認された住居跡と共通する点が見られる。本遺跡で確認された袖石付のカマドは南橋東原遺跡では約21軒確認されており、そのほとんどが両袖に川原石を立させたカマドである。また数は少ないものの焚口の天井石も残存するカマドも数基見当たる。本遺跡のカマドでは焚口の天井石は確認されていないが、使用時には存在し、カマドの取り壊し時に外されたと考えられる。支脚石はカマド内や右壁に寄った位置で確認された。取り壊し時に動いたわけではなく、石を据えるための掘り込みが認められる事から構築時に設置されていたと考えられる。南橋東原遺跡H-25(6世紀後葉)で石組カマドが確認されている。このカマドは両袖石、焚口の天井石が使用時のままの状態で検出されている。燃焼部内にはカマドに掛けられていた土師器甕が2固体横並びの状態で出土しており、2個掛けのカマドであったと考えられる。本遺跡の住居跡カマドも同様の2個掛けのカマドであり、右側に設置した土器にだけ支脚石が備わっていたのではないかと推測される。南橋東原遺跡では6世紀中葉から9世紀中葉までの連続と続く集落跡が確認されている。本遺跡で確認された住居跡もこの集落の一端を担っていたと考えられる。

旧流路と周辺地形

検出された礫群(礫層)は当初、白川扇状地を形成する土石流によって流されてきたものと推測していたが、流路方向・礫層下の調査・周辺土層との対比を経て、白川扇状地上を流れている旧河川の流路跡と判断した。白川扇状地は新旧二つの扇状地から構成されており、古い方は古利根川の浸食崖によって広瀬川低地帯と画されている。新しい方は古い扇状地の肩部から扇端部にかけて広がり侵食崖の全面に張り出し形成されている(早田1980)。本遺跡から北西へ400mのところを流れる大堰川から上細井町に所在する前橋市北消防署までの約1.6kmの間は新しい扇状地を造る砂礫層によって侵食崖が埋没している。本遺跡もこの新しい扇状地上に立地しており、基本層序Ⅷ層以下の砂質土層が白川扇状地を形成した堆積層であることが言える。旧流路の全体像や明確な年代、古利根川との関連性等は今回の調査では明らかにはできなかった。

註

- (1) 「南橋団地のボーリング調査によると、層厚3~12mという厚い砂層がこの扇状地をつくっている。広瀬川砂礫層は、この扇状地砂層に埋積されているから、白川扇状地は広瀬川低地より新しい地形面になる。」(澤口2015)

参考文献

- 早田 勉 1980 「群馬県史 通史編1」 p.86-88 群馬県史編さん委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2008 「南橋東原遺跡」
澤口 宏 2014 「前橋台地の利根川」「良好な自然環境を有する地域 学術調査報告書」第40号 群馬県環境森林部自然環境課
澤口 宏 2015 「前橋台地の利根川 その2」「良好な自然環境を有する地域 学術調査報告書」第41号 群馬県環境森林部自然環境課



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



H-1 全景（西から）



H-1 カマド全景（北から）



H-1-2 遺物出土状況（北から）



轟跡全景（南から）



旧流路検出状況全景（南から）



旧流路土層断面全景（南東から）



旧流路に堆積する砾



調査風景（西から）



調査風景（南から）



H-1-1 (1/3)



H-1-2 (1/3)



H-1-3 (1/3)



H-1-4 (1/4)

報告書抄録

ふりがな	なんきつひがしはらいせきNo.2
書名	南橋東原遺跡No.2
副書名	前橋市南橋公民館本館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2019年3月20日

ふりがな	ふりがな	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経		
なんきつひがしはらいせき 南橋東原遺跡No.2	まえばしにじにあらんじまち 前橋市日輪寺町 160-81ほか	102021	30B20	36°25'31"	139°3'59"	20180801 ～ 20180828	350m ² 前橋市南橋公民館 本館改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南橋東原遺跡No.2	集落	古墳時代	住居跡 墓跡 土坑 ビット	1軒 1面 4基 2基	・6世紀後半から7世紀前半にかけての堅穴住居跡 ・As-C層下以前の旧河川の流路跡

南橋東原遺跡No.2

前橋市南橋公民館本館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月10日 印刷

2019年3月20日 発行

発行

前橋市教育委員会

〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4

TEL 027-280-6511

編集

技研コンサル株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社